

編集後記

▼戦後最悪の震災―阪神大震災で犠牲となられた五千名をこえる方々へ深い哀悼の気持ちを表すとともに、一日も早い復興をねがって頑張っておられる被災者のみなさまに心からのお見舞いを申しあげます。

▼現地から「人間は自然の一部だということをこんなにコッピドクからだでわからせるとは、裸同志の人間が互いの「人間の生命」を思い「元氣」を支え合う行為の行動があった」等の臨場感にあふれる一文を齋藤浩志氏からお寄せいただいた。大野隆一郎氏の「活断層と地震」の論考をえた直後の四月一日、五頭山麓で「直下型地震」がおきた。新潟県の防災対策の根本からの改善が急務だ。

▼特集の座談会では新潟県における「新しい学力観」の実情がリアルに語られている。知識や技能の習得より、こどもたちの「活動」(関心意欲・態度)が評価の中心にすわるとはいうが、司会の岡野氏は座談会の中で「調べ学習と発表」を「活動」とする実態が広がっているの報告をきかれ、こどもたちの協同のとりくみや討議がふかめられる「活動」が

あってこそ彼等の中の認識の発達が保障されるのだ。知的好奇心を触発する教師の働き掛けは避けておれないと指摘されている。特集への読者のご意見がたくさんよせられることを期待している。

(本田)

▼八木三男氏の「マディソンからシカゴへ」は、通常の紀行文の域を超え、きわめて思索的です。個人的なことを書きながら、普遍的なものを内包しているところが魅力で、「三孫と子ども博物館へ」は、その典型です。日本にも、ブリーズ・タッチの博物館が一般化することを望みます。

▼下村省一氏の「直江津捕虜収容所の悲劇と平和友好記念像」は、戦後五〇年にふさわしい力作です。「学徒兵で出陣、玉砕寸前で終戦」という氏の体験が行間にあふれている感があります。

直江津とその周辺でこの「捕虜収容所展」が開かれ、子どもたちが多数見学しています。子どもたちがこの問題をどのようにとらえているか、ひきつづき書いていただきたいと願っています。

▼高橋弘之氏の「危機に直面する新潟市の学校図書館」は、新潟市の誇りうる施策の一つ

「一校一司書」の方針を守らせるたたかいを多忙のなかで書いていただきました。

▼西原嘉穂氏の「地域に根付いた子育ての場を求めて」は、子どもたちが多数な人たちの関わりのなかから育つさまを改めて考えさせてくれます。

(吉田)

にいがたの教育情報 No. 41

1995年3月31日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所

発行人 長崎 明
新潟市東中通1-86 山崎ビル2F
〒951 電話(025)228-2924
振替口座・新潟4-12332
印刷所・中央印刷さあびす

本誌内容の無断転載を禁じます。